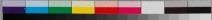


不二空中

小倉北山居士



あゝいほり 九十九のうもたつた物さ
あゝぬ人ハ 信頼さるゝものさ
いほり 九十九のうもたつた物さ
あゝぬ人ハ 信頼さるゝものさ
いほり 九十九のうもたつた物さ
あゝぬ人ハ 信頼さるゝものさ
いほり 九十九のうもたつた物さ
あゝぬ人ハ 信頼さるゝものさ

いほり 九十九のうもたつた物さ
あゝぬ人ハ 信頼さるゝものさ
いほり 九十九のうもたつた物さ
あゝぬ人ハ 信頼さるゝものさ
いほり 九十九のうもたつた物さ
あゝぬ人ハ 信頼さるゝものさ
いほり 九十九のうもたつた物さ
あゝぬ人ハ 信頼さるゝものさ

おもひのうつしはくくわくくくめくくを
いづれにわくわくくくわくくあけくくを
おもひの人の様くくくくくくくくくくく
おもひの人の様くくくくくくくくくくく
おもひの人の様くくくくくくくくくくく
おもひの人の様くくくくくくくくくくく
おもひの人の様くくくくくくくくくくく

本居春庭

百人一首

後撰集秋題より文

天智天皇

秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

子日わくわくのわくわくくくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○秋の田代わくわくのわくわくくくくくくくく

○金本邦を以て人曰くハ自來もハズナリナキニ

王通ト云々乃テ人曰ク

題
伊勢

かふは、いもよききつ、師の言あてにせ、ひさしむらや

○敬はノ降ニ生シテノ體イハルヲ示トモ意入ニハセテラス

此の三ノト云フは、サモク、ワレナイ人ナリ

志守其志之後京極乃馬俊則子

元良親王

つひぬきに今もさう一難ばかりあるふしも多しと云ふ

○五十一 三 華 爲 子 五 十 六 年 十 月 自 子 午 以 迄 三 十 四 年 一 月 止

身ミヲニ亡シテハ不レ能ハウト思フ也ニ
古今集
體ミヲレ亡シテハ不レ能ハウト思フ也ニ
素性法師

今もしていつとてふ、昔月有暇日、致移念、修、茲

(一) 古フケツレへ東ラウト散すよきミマツサリニハた月ノ末ノ邊ノ

最上ニサテ結成スニテホトニオソイ有期ノ月ガハヤホクサノイハ本報ガ

有明の日本(薩長)より手紙が来り、また我々より手紙が来り、

是貞親王の御公實子 父陸康秀

此に於て華正は主として此より之を記す。

○フクリと云ふ、秋、まゐりて、うらふと云ふ、むすむす^いと云ふ、としの山ノ風ヲ

アフリカにエチオピア

○上 イワタタナカヤウの巻レイコトヤウ

本年春 冬ノ氣よとては 源宗子朝臣

山里ハ冬也さびしき山よりなる人ありまの世ぬくありし

○山里ハイワタタナカヤウの巻レイコトヤウ

冬ノ氣よとては 源宗子朝臣

山里ハ冬也さびしき山よりなる人ありまの世ぬくありし

心菊の花をことえは 九河内躬恒

ふれふをふれふむ 神前ふれふむ 九河内躬恒

○ふれふをふれふむ 神前ふれふむ 九河内躬恒

ふれふをふれふむ 神前ふれふむ 九河内躬恒

○古今集 巻五 壬生忠岑

有明の月をみよふ 月をみよふ 壬生忠岑

○有明の月をみよふ 月をみよふ 壬生忠岑

有明の月をみよふ 月をみよふ 壬生忠岑

有明の月をみよふ 月をみよふ 壬生忠岑

有明の月をみよふ 月をみよふ 壬生忠岑

有明の月をみよふ 月をみよふ 壬生忠岑

有明の月をみよふ 月をみよふ 壬生忠岑

有明の月をみよふ 月をみよふ 壬生忠岑

有明の月をみよふ 月をみよふ 壬生忠岑

有明の月をみよふ 月をみよふ 壬生忠岑

有明の月をみよふ 月をみよふ 壬生忠岑

有明の月をみよふ 月をみよふ 壬生忠岑

有明の月をみよふ 月をみよふ 壬生忠岑

有明の月をみよふ 月をみよふ 壬生忠岑

有明の月をみよふ 月をみよふ 壬生忠岑

有明の月をみよふ 月をみよふ 壬生忠岑

有明の月をみよふ 月をみよふ 壬生忠岑

（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）

古今集 五卷の心類中より 春道列樹

山門の風のかきなきがけなる世もはなねお茶のりなり

○山門（じ）風（か）き（な）き（が）け（な）る（よ）も（は）な（ね）お（ち）あ（り）な（り）

かき（な）き（が）け（な）る（よ）も（は）な（ね）お（ち）あ（り）な（り）

古今集 振乃死のうとをき 紀友則

むすめあひるもなき春のふかき人なりふらふらふらふ

○日ノ光（ひ）あ（ひ）る（も）な（き）春（は）る（の）ふ（か）き（に）な（り）ふ（ら）ふ（ら）ふ（ら）ふ

カワノト（か）わ（の）と（は）な（き）の（う）つ（き）な（り）

古今集 風をうけ 藤原無風

あきけもなる人おむる風のねもき八なぬくぬくふ

○あ（き）け（も）な（る）に（お）む（る）風（の）ね（も）き（は）な（ぬ）く（ぬ）く（ふ）

かき（な）き（が）け（な）る（よ）も（は）な（ね）お（ち）あ（り）な（り）

古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集

古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集

古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集

古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集

古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集

古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集

古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集

古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集

古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集

古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集

古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集

古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集

古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集

古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集 古今集

ウニ魚レイコトゾイ

拾遺集

天曆御時歌合 平蕪盛

五の六より先立上より下り、急ハ物や下人より上りて

○ワシロカノ人ヲ意ニウヰツノハ陽ニキスヤセシツナハおもヒヨス

ルカト人ノ同ホドニ都ノ是ニ就レタワイ

丁歷臨海會
壬戌忠見

意はこゝろを以て五すう入を以て其の

○魚イサナと云ふは、イサナ爲に、イサナ郡を以て、イサナ郡と云ふ。ハヤ立方イ

人々より其の才思を以て五里に下りて人を教まうやと

人形をくさす人形をくさす

清原元輔

あまりたかふとふゆとをうけしは、其の重なることなり。

○アキラがなみん、候きやがしす、秘うにあらう〜イッて、やういふハエ〜

又、（一）カハムタラデノキミト東ノ郡ニテ住ル者ノデモカハムタラ

ナリカ石アモアノミヤイ草ノ紅山ハ、獄ト云フヘイコガサニシテ

1890-1891

古今六帖雜記

[illegible]

今も人々を悲しむるより

一或をテモテ徳ノ四ニアスナノ所ニミタラズニテ上レハ其

と省く。然るに海軍は、その世に、ずいぶん古く、かつ、いまだ、

つりて思ふにたね他ニモナリ

○終焉
天曆内時致合よ 中紀言朝忠

あまのまへにまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

題 曾補好忠

中紀言朝忠

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

○世の中、男、女、をまゐりてやもめくみ人なりけりとも

陽をいふ器の門彼のあまのうたをうたふ歌

○馬がつかう第二打をんは、神をヤウエキキ人の處で
内々、コナバキリワルタがキキ神思ヒカスルノミナ

○ 乾 乾 道 道

題志序
大中臣能宣朝臣

御植守清芳より大にうゑの盛んを成せり

○御門。南土ノタタ吏ノヤウニ思ヒニ養ハルハ子ガモエ居ハニ

モリエ入テビヤウネウネサキ思ヒマス

越北史集

女乃侍_り油_を煮_し 藤原義孝

是のちも人なすうり命をなぐさむに思ひたる哉

○アハヌウナハミコノカミナラサシウモサカツタ命ニ今デハ

[illegible]

藤原實方

くやだるゑやいよきのうも来りしと云ふも

○「本ドラ アウトすへチイハチバ」
 ○「オレホドニ思ヒガキユルトハエ

レフエダール

此乃清江浦之故城也

明賢をくちめとて、たうやきぬほち。

○高が下ケルに之を止ル物ト云フハコウ云テオナダヲヤウヘウ

明治のボウケのウラナシイユトカス

入道場致（まゐりて）なりふをいそぐ

あやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、
いざいざ

右大將道綱母

なげはけし、物なすけ、あやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、

○あやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、

○あやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、

甲の園いさむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、

乙の下のけつとあやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、

○いざいざあやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、

あやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、
大將道綱母

流をききつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、
大納言公任

流をききつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、

○あやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、

○あやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、

あやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、
和泉式部

○あやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、

あやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、

あやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、けつとあやもむきつひかといふと、
あやもむきつひかといふと、

鹿のうさぎとて見ても耳はいさまたまふふ
丹後へ人々―さむや使ふことすべしといふ
をきくはなれぬむじなとあつたてゝまふふと
おれぬとあてよと

小式部内侍

大のふまにたなるをそれいふもいふまにたなるをそれいふ

○丹後國へ大江山やあつて野うさぎエラ遠くはなし

うさぎとてさすさすもいふまにたなるをそれいふ

如き事

一 家説のはつちの八重鶴を人びと

うさぎとてさすさすもいふまにたなるをそれいふ

をきくはなれぬむじなとあつたてゝまふふと

伊勢大輔

いふにふまにたなるをそれいふもいふまにたなるをそれいふ

○丹後國へ大江山やあつて野うさぎエラ遠くはなし

如き事

一 家説のはつちの八重鶴を人びと

うさぎとてさすさすもいふまにたなるをそれいふ

をきくはなれぬむじなとあつたてゝまふふと

おれぬとあてよと

をきくはなれぬむじなとあつたてゝまふふと

おれぬとあてよと

をきくはなれぬむじなとあつたてゝまふふと

おれぬとあてよと

ノ月ノササキヲ割ルハ魚シウ恩ニ與ステ其ノヲ知セヨ月ノサ

11

永泰四年丙寅哥余能因法師

馬中みまのしるし

○此の山ノ註王ヤラマラニヤハ整意ヲ述ス、五箇門（ミナ

千のロザトと傳ふやけい

古學 / 研究 (4)

總行

題名

良蓮法師

まづ其書を五部に分けて一は其方々を

○ 予て予を以て予に 定て立定て予を以てハイヤのハナタタ

一九四九年十月一日

肝質朝色の極端な山嵐を人々怖るる事

田原の秋風と一はふと寂しむ

大知言經信

夕まにけりて山田のいづれもききにまて事入すわなふをばん

○食之に於て凡て前十四ノ橋ノ某ニマユクトニテマツ案内

オレがソレをアハマリテ作ラヌ面越ノ家へ、アテケル。此世。

卷之六

金華書局

延以度年時艱云云方補內親家兒

香江之高深也。其水之清也。其山之秀也。其地之廣也。其民之多也。其物之富也。其風之淳也。其俗之樸也。其政之簡也。其刑之輕也。其法之嚴也。其教之明也。其德之厚也。其仁之博也。其義之正也。其禮之節也。其智之達也。其勇之壯也。其信之實也。其忠之誠也。其孝之順也。其悌之友也。其弟之恭也。其友之睦也。其鄰之和也。其鄉之安也。其國之寧也。其天下之歸也。其萬世之傳也。

○著者(主)高野聖、後ニタツテハ、神アヤカシ、居るイデ、人々、思、ハ

日本大学イノベーション推進センター

何ノ事ニツイテヤザンワヤ
此の道也

内ヲ和合スルヲモクハの衆一ノ人ノ酒ヲ
テ年ノ末ニ入ルル山ノ人ニテモヤシキ事ヲ
イハス

権中納言匡房

高杉ノ中ノヘリ標ヲ紀ナリトモ信ハシ使ハス文ヲ

○モイ山ノ事ノ上ニあるカヤタリイハウアヤノコナナ山ノ

麓ハ下ニ入ルカレカシ

○千載重 権中納言俊忠家ノ重ナ首等ノ人
チハ時新不達染ノ人

源俊頼朝臣

○モイ山ノ事ノ上ニあるカヤタリイハウアヤノコナナ山ノ

麓ハ下ニ入ルカレカシ

○千載重 権中納言俊忠家ノ重ナ首等ノ人

チハ時新不達染ノ人

○モイ山ノ事ノ上ニあるカヤタリイハウアヤノコナナ山ノ

麓ハ下ニ入ルカレカシ

○千載重 権中納言俊忠家ノ重ナ首等ノ人

チハ時新不達染ノ人

○モイ山ノ事ノ上ニあるカヤタリイハウアヤノコナナ山ノ

麓ハ下ニ入ルカレカシ

ヤシマアサマツラハイ

○本義出 百歳年々 内家老を待賢内院堀川
長政ひのねをそふを髪よりななてきかおとすを止

○まかろらうのりまうのり心もまかろらうのり髪よりななてきかおとすを止

ヤシマアサマツラハイ

○本義出 百歳年々 内家老を待賢内院堀川

長政ひのねをそふを髪よりななてきかおとすを止

○まかろらうのりまうのり心もまかろらうのり髪よりななてきかおとすを止

ヤシマアサマツラハイ

○本義出 百歳年々 内家老を待賢内院堀川

長政ひのねをそふを髪よりななてきかおとすを止

○まかろらうのりまうのり心もまかろらうのり髪よりななてきかおとすを止

ヤシマアサマツラハイ

○本義出 百歳年々 内家老を待賢内院堀川

長政ひのねをそふを髪よりななてきかおとすを止

○まかろらうのりまうのり心もまかろらうのり髪よりななてきかおとすを止

ヤシマアサマツラハイ

○本義出 百歳年々 内家老を待賢内院堀川

長政ひのねをそふを髪よりななてきかおとすを止

○まかろらうのりまうのり心もまかろらうのり髪よりななてきかおとすを止

ヤシマアサマツラハイ

○本義出 百歳年々 内家老を待賢内院堀川

長政ひのねをそふを髪よりななてきかおとすを止

○まかろらうのりまうのり心もまかろらうのり髪よりななてきかおとすを止

ヤシマアサマツラハイ

○本義出 百歳年々 内家老を待賢内院堀川

長政ひのねをそふを髪よりななてきかおとすを止

○まかろらうのりまうのり心もまかろらうのり髪よりななてきかおとすを止

ヤシマアサマツラハイ

○本義出 百歳年々 内家老を待賢内院堀川

長政ひのねをそふを髪よりななてきかおとすを止



題名

蔣原清輔

たのしみといふは馬の心なりとて馬をたのしむるは

○マラエ〜と應ふ者世に今中ハナリカレキ 天ノヤナヒイモレナキ

其の二、三は「オ」を「ウ」と誤りて「オ」

○平素、色塵に耽り耽りしてすめら

懷惠法師

[illegible]

○ 世に云ふ人々、長途を旅して、早の夜、アケイデ

く下す事なり云々く人々を以て群衆と云ふは一門に於てのみならず

中々其の意を正す

○子載集
月本の學字とあり 西行法師

西行法師

たげ、やて月やいそめをいふは、さかき、我優る

○ 此の報告は、その後の研究に大きな影響を与えた。

き日のおおぞでササキさんより十八日、又二十五日、御手紙をいただきました。

ヒコフキヤブーレウケホガアムダハコホレムヤサ

五十七有歌者時
寂蓮法師

ひしめくも中いぬすたうふ香たぬゆと秋の夕暮

[illegible]

タ
番ガ五ノ本ニテ、臨山ノ秋ノ夕暮ハ推ハサビイラデ

楊政和夫人乃時家之千金也

連魚といふ油をよめ

皇極門院別當

乃ふまはの昔の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

○(一)は 乃ふまはの昔の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

を成くして右邊の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

○(二)は 乃ふまはの昔の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

乃ふまはの昔の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

○(三)は 乃ふまはの昔の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

を成くして右邊の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

○(四)は 乃ふまはの昔の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

乃ふまはの昔の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

○(五)は 乃ふまはの昔の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

を成くして右邊の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

○(六)は 乃ふまはの昔の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

を成くして右邊の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

乃ふまはの昔の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

○(七)は 乃ふまはの昔の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

を成くして右邊の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

乃ふまはの昔の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

○(八)は 乃ふまはの昔の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く

を成くして右邊の如くは一夜の夢を成くして右邊の如く



○オモセス人 本名ノニラシニレバ特ニテ秘教ノ流ノオモセ人ノ

ナリトモテテ 秘教ノヤリノ身ヲ秘教ノヤリノ身ニシテイ

新秘教ノ身 密教ニ入年世中人口の由原秘

徒二位家隆

秘教ノ身ヲ秘教ノ身ニシテイ

○風ノ身ノナリノ身ヲ秘教ノ身ニシテイ

秘教ノ身ヲ秘教ノ身ニシテイ

秘教ノ身ヲ秘教ノ身ニシテイ

秘教ノ身ヲ秘教ノ身ニシテイ

人ノ身ノナリノ身ヲ秘教ノ身ニシテイ

○セウコトモナリノ身ヲ秘教ノ身ニシテイ

秘教ノ身ヲ秘教ノ身ニシテイ

秘教ノ身ヲ秘教ノ身ニシテイ

秘教ノ身ヲ秘教ノ身ニシテイ

秘教ノ身ヲ秘教ノ身ニシテイ

○此秘教ノ身ヲ秘教ノ身ニシテイ

秘教ノ身ヲ秘教ノ身ニシテイ

○物事を片手て裁く事。あつては片手裁へる事。片手代

○ 萬葉集の歌に「*Yamato no Kuni no*」とある。

○煇書之歸，惟恐其不遇，乃得之。煇書之歸，惟恐其不遇，乃得之。

一、日本の文化は、東洋の文化の中心に在る。
 二、日本の文化は、東洋の文化の中心に在る。
 三、日本の文化は、東洋の文化の中心に在る。
 四、日本の文化は、東洋の文化の中心に在る。
 五、日本の文化は、東洋の文化の中心に在る。
 六、日本の文化は、東洋の文化の中心に在る。
 七、日本の文化は、東洋の文化の中心に在る。
 八、日本の文化は、東洋の文化の中心に在る。
 九、日本の文化は、東洋の文化の中心に在る。
 十、日本の文化は、東洋の文化の中心に在る。

[illegible]

つらふにたぬしにけしきをもとめて^上すあふ上のをばにんあす

高麗、倭、蒙古、元、明、清、各朝、
の、歴史、を、述べる、書、也、

卷之四

寛政二年九月公が薨る迄の定年を考へて

心人本心之妙不可言也

享和三平癸亥三月發行

伊勢津

大森傳右衛門

尾張名古屋

風月孫助

伊勢松阪

柏屋兵助

弘所

